

経過報告と問題提起

「広域離島高等学校群の創設を」

一般財団法人地球共生ゆいまーる理事長

(桜美林大学大学院特任教授)

橋本 晃和



【司会】引き続きまして、当ゆいまーる財団の理事長 橋本晃和からこれまでのゆいまーる財団の取り組みに関する簡単な経過報告と共に離島から地域創生を考える上での一つの問題提起をさせていただきます。

その問題提起のテーマは「広域離島高等学校群の創設を」です。橋本理事長お願いします。

【橋本】今ご紹介に預かりました橋本晃和と申します。本日は本当にお忙しい中、多数ご参加頂いて心からお礼申し上げます。

私ども一般財団地球共生ゆいまーるは沖縄離島振興協議会のお力添えを得て、本日、盛大に開催することができましたのもひとえに皆様方のおかげと思っております。

中でも私のお世話になっている桜美林大学の佐藤総長も沖縄に御縁があるというご説明をいただいて、みなさんと共にいろんな感情というか共感をなされたことと思ひまして大変私もうれしく聞かせていただきました。

今日、私の方からは簡単な経過報告と新しい問題提起をさせていただきますと思います。

時間の関係上、まず「一般財団法人 地球共生ゆいまーる」が掲げています理念を読ませて頂きます。

私たちは限りある“いのち”あるものとして

この地球上でお互いに出会い 共に支えあつて生きている(ゆいまーる)

21世紀に生きる人類が未曾有の危機にあるときに

後世に地球上の人々が共生できる環境を創り

これを後世に継承する義務がある

この環境作りに もつともふさわしい場所

それが『沖繩』!

沖繩は人類共生の『磁場』

人間と人間の共生が『平和』

人間と自然の共生が『環境』

ということを書かせて頂いて、2008年5月8日に沖縄県の許認可を得て今日に至っております。

一貫して、地球共生を沖繩から、今日は離島からというふうさらに発展させた話につなげていければという強い意思を持って我々は活動しております。

共生というのはみなさん使っておりますし非常に簡単なようですけども、またこの21世紀の今日にあつて、人類と人類の共生が非常に難しい時代になりました。

世界経済の縮小の中で反グローバルリズムが入り、保護主義がはびこっていくのがこれから数年間続くかと思えます。

一方、各国の政治経済の中でも一際難しい時代が来たなあと思っております。

これからは、沖縄が日本に対して責任ある行動が必要であり、沖縄からこそ日本の振興・繁栄の新しい生き方、共生の在り方を考えながら、特にアジア太平洋・南太平洋含めた中で、離島を維持することだけでも離島の皆様方が日本の本土に対して貢献をなされているという強い自覚を再確認して、前向きな政策を進めて行かなければならないと思えます。

沖縄県も21世紀ビジョンを作りました。その曲がり角にあるとき、ちょうどたまたま平成24年度には、それまで5年に1度でしたが、今は3年に1度実施しております沖縄県企画調整課の県民意識調査を私どもゆいまーる財団が企画・実施をさせて頂きました。そこで新しいキーワード・新しいコンセプト・新しいアプローチで分析の手法を作った次第です。

ひとつは幸福度・幸せ感、これも後で少し述べる時間があれば有難いと思えますが、幸せ感の捉え方というのは沖縄県が人類の発展上一番進んでいるのではないか、ということを改めて確認した

私どもが行った独自の調査結果も出ております。

一言だけ言いますと、東京の人たちよりも沖縄の人たちの方が「幸せ感」が高い。しかも、さらに言えば東京の人はそこに住んでいるから幸せではなくて、そこで生活がちゃんとできる、給料が良い、だから東京に住んでいる、だから幸せだというような因果関係があります。

しかし、調査結果を東京と沖縄で比較分析すると、沖縄の人たちは、沖縄に誇りを持っている、沖縄に生まれたことに誇りを持っている、あるいは絆がある、あるいは健康である、だから「幸せ」である。幸せな人ほどそういう意識が強いということが当財団の自主事業の調査でわかりました。

「幸福度」の因果関係が沖縄と本土、東京の人とは逆方向であることがわかります。いかに健康であること、いかにそこに誇りを持つること、ということが東京、本土では蝕まれていることです。

沖縄は絆が強いということが言えますが、しかしそうは言っても、その絆がだんだん弱くなってきたというところも県民調査結果で表れています。昨年と同じようなうちのノウハウを使っていたら、別の団体が調査をした結果が今年出ておりますけれども同じような傾向が続いております。これをどこかで止めなければいけない、悪い傾向がでております。格差感もそうです。子供の貧困もそうです。

しかし離島から見た場合には、スライドの一番最後に書いていますけれども、離島と沖縄本島とでも、実は意識が少しずつ開いてまいりました。

さらに言えば離島の中でも、八重山諸島、石垣・宮古のような大きな離島と小さな離島では実は意識が大きく開いているということを私どもの自主調査結果から発見しました。

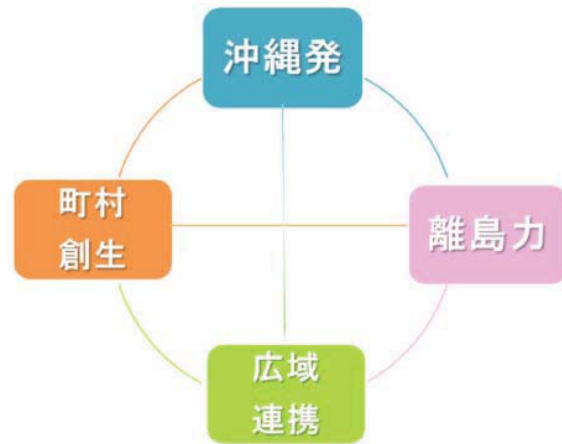
5000人以下の離島、特に200人前後の離島の人たちには実はまだこういう調査を実施しておりません。いつかやりたいと思っております。

そこで当然予想されることは、今のこの悪い流れを止めることはもちろん大事です。その上に立つて、沖縄が今、直面している問題を解決するために、離島からの視点に立つてやっていきたい。

ということで、今年の3月に、林省吾元事務次官に基調講演をお願いして、シンポジウムをやりました。その時には、沖縄から地方創生を考えるとという形でやりましたが、彼は私にいろんなことを教えてくれました。地方自治の私の師匠です。

出来の悪い弟子が考えたことに一つの注意を頂きました。それは何かというと、「国から地方を見る目で地方の振興をはかるのが地方創生である。地域そのもの、離島からの視点で創生を考えるのは地方創生とは言わないのだ。地域創生というのだよ」と改めて教えられました。

「どうなる・どうするあなたの町村
沖縄から地方創生を考える」(2016年3月16日開催)
沖縄発地方創生のための 4つのKey Words



(一財)地球共生ゆいまーる

そこで私は、そこに書いてあるように、町村創生ということを書きました。沖縄発の町村創生が、離島は39指定有人離島がありますから、その中でどういうように広域連携をしてくかということが非常に大事である、という形で私なりに「離島力」というものを定義しました。

いうまでもなく日本は海によって成り立つ海洋国家です。

海洋政策の要「海洋力」を支えるのが「離島力」です。中央からの地方創生としての離島の振興推進と共に、離島から主体的に地域創生を図る力が離島力と定義させて頂きました。離島力というものが非常に大きなキーワードであるということは、先ほどお話を頂いた甲斐さんの上司にあたる海洋政策研究所

のすぐれた業績をなされている寺島所長からお言葉を頂いて、お前、それをぜひ沖縄でやった方がいいよと言われて激励をされてここにやってきました。

ということ、この後のことはもうすでに、能登さんや甲斐さんがお話になったこととかなり重複しますので、省きます。

そこで、人が住んでいることが離島そのものの基本要件になるということについて少しだけ述べていきたいと思います。

ご存じのように、人が住まなくなったら島から岩に変わります。そうすると接続水域、E E Z もなくなつて、単なる岩であると、世界の面積は、6位どころではなくて、限りなく61位に近づいていくことになります。

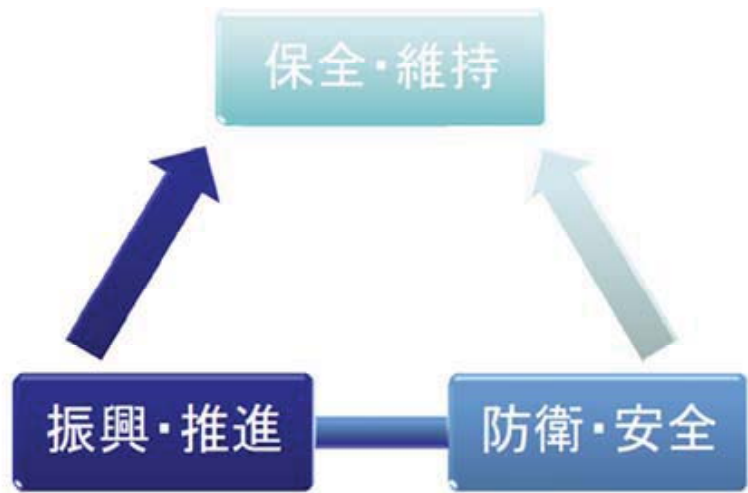
それだけでも離島の力、特に沖縄における離島の力というのは、先ほどもご説明があつたように、南北400キロ東西100キロ、その中心の那覇を大阪に置いたときに、これは内閣審議官から教わつたことをそのまま言わせて頂くと、大阪に中心を置いたときに今日お見えになっている北大東島・南大東島の東の端ですね、ちょうど私の住んでいる横浜の南になります。

西というのは、今日も外間会長の住んでいる、南西の与那国が当たります。

そして南北の400キロと、そういうような地理感覚、要するに何を言いたいかというと非常に物理的に離島間の距離が遠いということが、他の本土の離島とは全く違う。

いくら離島振興のお金をもらつても知恵が出てこない、なぜ出てこないかという物理的に一つの島で何かをやるとうということとは非常に難しい。だからこそ内閣府や総務省が広域連携ということを何年も前から打ち出している理由がそこにあります。連携してこそ広域に初めて力を発揮す

図1 離島は国富である



（一財）地球共生財研究所

ることができるといふことです。

したがって、ここに書いておられますように、離島については振興推進が今まで基礎で、国と県、あるいは町村、市町村が中心となつて一括交付金の下にいろいろやられておりますし、それを新しい方向を、先ほど説明をなされた通りです。

で、離島と言うときに沖縄の場合は2004年の島嶼防衛の法案が通過後、石垣島・宮古島を中心にどんどん進んでおります。ましてトランプさんが大統領になった後は、日本にとって大事な尖閣諸島や南シナ海辺りをどういふふうに進めて行くのかということ、は国境に寄り添いながらどこころではない、国境そのものをどうしたら守れるかということを考えなければいけない。

それは離島というものに島嶼防衛の視点からすでに防衛省が取り組んで行動しています。

今日の話はそうではなくて、それだけではダメだ！離島というものを先ほども甲斐さんがおっしゃっていたように、特定地域における有人国境離島の「保全」及びその地域社会における「維持」、この「保全」と「維持」というものをどうするかという視点でさらに取り組んで行かなければならないの

です。すでに2016年3月に成立し2017年の4月1日から実施されることになっています。

実はこれも先ほどもおっしゃったように、この法案には小笠原諸島・奄美諸島と共に沖縄が含まれておりません。これは、沖縄振興でやっているからです。先ほどもお話ししたものに、さらに付け加えさせていただくなれば、何故沖縄が入っていないかについて内閣府が説明を致しております。

一方、今年は沖縄の子どもの貧困対策で新しい国家的事業として、すでにプロジェクトが始まっております。島尻安伊子先生を中心としてやっている大変重要なプロジェクトです。

これに続く第2弾として、すでにホームページには出ている話ですが、来年から“先導的な事業”即ち「既存事業の隘路を発見し打開する事業」にすでに予算請求を行っているところであり、本日お越しの内閣審議官の方々を始め内閣府で取り組んで頂いているところです。そのお手伝い、推進の役割を私が仰せつかつて本日のシンポジウム開催となったわけです。

話は元に戻るようですけれども、林先輩から言われたことは、今日の問題と大きくかかわっております。

まず、教育というのは良く言われる言葉で言えば『未来からの留学生』ということが良く言われます。その視点がまだ沖縄には残念ながら乏しい。乏しい理由は、これも先ほど甲斐さんがお話しになった通り、この離島法案には教育というものが実は入っていないのです。したがって教育というもの

新しい離島像



(一財)地球共生ゆいまーる

を離島群の中で直接やろう、離島は国家の一大事だからという発想から私はスタートしました。

なぜ、離島に高等教育機関、あるいは高等学校がないのだろうか、ということが私にとって本日のテーマの出発点となったのです。これについて今日は集中して後半の部分でお話したいと思います。

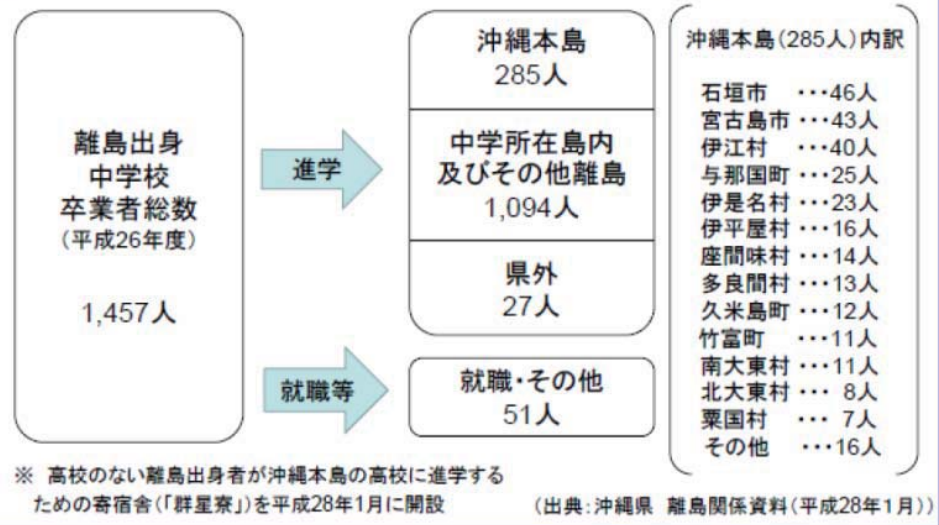
「教育・子ども」ということですが、「医療福祉」と「航空航路」との三つが三位一体となって新しい離島像が描けると思います。

今日のところは「教育・子ども」に焦点を当ててお話をしていきます。

「教育・子ども」については、先ほど述べたように島尻安伊子先生が中核となつて「教育・子ども」の機会均等を図るため沖縄の子供の貧困対策を推進すべく、法案が既に可決されて、現実に実施されているところです。この度、新しく私が発案させて頂いたのは離島の「教育・子供」の機会均等及び高等教育の質・量ともに充実をはかるといふことです。これを内閣府が提示する先導的事業として推進できないかというわけです。

離島の教育状況における実状を少し見てみましょう。これは私にとって大変ショックな、分析すればするほどショックな問題点が含まれていることに気がつきました。

離島出身の中学校卒業者の進学就職状況



第3回沖縄振興審議会 会長・専門委員会合(平成28年10月13日) 資料5 46頁より

(一財)地球共生ゆいまーる

これは平成26年度離島出身中学校の卒業生総数は1457人です。そのうち、沖縄本島の高等学校に進学した人はわずか2割弱なのです。ということは、7割強の人が同じ中学校を出て同じ島かその辺の島に出て行って、沖縄本島には来ていないということになります。

私は今日のテーマの研修生(インターン)としてお話をさせて頂いています。勉強させて頂いている真つ最中です。

今日は、教授陣が先にお話しなされたので、非常にしゃべりづらい点も今感じていますけれども、その中で、沖縄の、まして離島の子供たちが持っている潜在能力の芽を若くしてつぶしてしまつてはいけないということです。

では、離島に高等学校がどのくらいあるか、もちろんみなさん、釈迦に説法な話ですが、石垣に3つ、伊良部に1つ、宮古に3つ、久米島に1つ、8つしかないですね。この8つというのはどういう状況なのか、それを見るときに沖縄本島に行った人たちの数字がここに書いてありますけれども、この中で1457人の就職

先あるいは進学先をフォローしてみますと、1311人が就職者・進学者、就職者が304人進学者が730人、そしてなんと未就者が277人、この合計が1311人です。1457人と合わないことに気が付いたのです。この差の人たちは、146人は一体どこに行ったのだろうか。不登校がつい最近の地元新聞でも全国平均の2倍あると出ていました。これもショックでした。

不登校とか、あるいは中学校を卒業してなぜその場でいるのだろうか。

お金の問題もあります。群星寮が今年できました。120名の定員で、今のところ定員割れしているとはいえ、いずれ新年度からずっと入っていくと満杯になるでしょう。しかし、そんな人数では合わない。なおかつ、本島にはなかなか来ることはできない。

本島にお母さん付きで来て下宿やつてですね、月なんと20万かかるわけです。いろんな意味でね。年間240万。そういうことを出せる人は限られた人数しかいないのです。ということで、行方不明の146人も実は不登校なり、どっかに統計上に表れない形で出て行ったと考えられます。

教育委員会関係で数字に詳しい人にぜひ教えて頂きたいと思つているところですが、要は何を言いたいかというところ、高等学校が無いということは何を意味するかと、地域再生で有名になった海士町には、人数は少ないけどもあちこちから、物理的距離が近いから、高等学校が1つあるのですね。なぜ、沖縄には8つしかないのか、そこで、これからの私の提言になりますけれども、発想を変えて

みましよう。

人数が少ないから文部科学省が高等学校を作れない、それは間違いだと。今、沖縄の離島の小学校・中学校で先ほど言った島でも、かなりICT教育、プログラミング教育、あるいはまた海底ケーブルを利用したブロードバンドの整備が今なされつつあります。

それは、離島だからこそできる。離島だから遅れているという発想は2010年で別れを告げましょう。いつでも、どこでも誰でも学べるのがこれからの離島の教育現場です。

ということは、離島が逆に有利になります。そのところに目をつけて、これから創っていかなければいけないというのが私のスタートラインになりました。

このきっかけになったのは、伊江村に初めて民泊をしたときに、ここに高等学校がなぜないのですか、と言ったら人数が足りないからです、と言われました。

良く調べてみると、人口の多い離島順に言えば、もちろん石垣・宮古は別格として、伊良部島・久米島について5番目に伊江村があるのです。

伊江村の人口が、5000人弱です。第4番目に位置する高等学校のある伊良部島と600人しか違わないのですね。

その伊江村の村長にそれをお聞きしますと、昔は伊江村と伊良部島の差が1万人以上あったと。

それがどんどんどんどん伊良部島の人口が少なくなつたということです。じゃ600人の差だつたら十分作れるじゃないですか、と思つたのです。

その伊江村の周りには、伊是名とか伊平屋とか、けっこう住んでいる人たちも本土に通つて高等学校がありません。

ということで、私のこれからのまだまだ試案中の試案で、全然人様にお話出来るような段階ではないのですが、あえて今日のテーマである問題提起という形で言わせていただくと、そうすると日ごろは自分の島でお母さんお父さんの中で一緒になつて、先ほど言つたような教育を受けられるようにしたらどうか。

定期的に何箇所かのプラットホーム(学校)に集まつて、次は別の離島でというように巡回して授業を受ける。そのことを気がついたのは、私がダイビングをやつています座間味村に行つたときに見学させてもらったときです。

座間味村の村は非常にコンパクトでWi-Fi教育その他、ものすごく進んでいるのですね。だからそういうところが、ほかにも私はあると思います。だけどそういうことを見ると、これは「広域離島高等学校群」というのは出来るのではないか、という実感を持つに至りました。

今日は粟国の村長さんも来ていただいています。粟国はそういう形で非常にシンプル、離島の中

で航空関係・整備関係の高等学校を作るのに熱意を燃やされていると聞いておりますが、一村ではなかなか難しい。しかし広域連携の下では出来ないことはない。

しかも沖縄の離島の中学校を卒業しても、たとえば山梨に航空学園というところに進学する筋道もできています。しかし、それもいいですが、離島そのものに何かを作つて、広域連携をもとに行つたり来たりできるようなものを、これから作つていきたいなあ、というのが、素人としての私の感想であります。

これから始まるパネルディスカッションで、ぜひ皆さん方のご意見も聞きたいと思ひます。今日は東村の一番遠いところからも離島でないにも関わらず、他にも金武町の方も来て頂いております。実は、私が先ほど申し上げた、離島のことを学んで定期的に学ぶ、集合する場所は市でなくて町村でもいいと思ひつています。

北部の方で、伊江村、伊平屋村、伊是名村があり、中南部で渡嘉敷・座間味群島があります。座間味群島というのが先ほど人口が増えたと言つていますが、座間味三島ではちよつと減つてゐるのですよね。それは数人であつて、本格的に増えているのは実は石垣だけなのです。人数のこととか全体の減少も重要ですけども、ひとつの置かれた個々の島がどういふ状況に置かれてゐるかということを踏まえた上でこれからやつていきたいというように考えます。

まだまだ問題提起としてお話をさせて頂きたいことがあります。丁度時間となりました。ここで私の経過報告と問題提起とさせて頂いて、とりあえず終わらせていただきたいと思います。ご清聴ありがとうございました。(拍手)